

夜討曾我

前

シテ 曽我の五郎時致

ツレ 兄十郎祐成

トモ二人 徒者団三郎

同じく鬼王

後

ツレ 古屋五郎

同じく 御所の五郎丸

同じく（二人） 敵兵

シテ 五郎時致

季は

駿河

五月

「其名も高き富士の嶺の。く。御狩にいざや出で
うよ。

十郎詞 「是は曾我の十郎祐成にて候。さても我君東八箇國
の諸侍を集め。富士の巻狩をさせられ候ふ間。我
等兄弟も人なみにまかりいで。唯今富士の裾野へ
と急ぎ候。

四人サシ 「今日出でゝいつ帰るべき故郷と。思へば猶もいとゞ
しく。

歌 「名残をのこす我宿の。く。垣根の雪は卯の花の。
咲き散る花の名残ぞと。我足柄や遠かりし。富士
の裾野に着きにけり。く。

十郎詞 「急ぎ候ふ程に。是はゝや富士の裾野にて候。いか
に時致。しかるべき所に幕を御打たせ候へ。

「畏つて候。

シテ詞

十郎 「いかに時致。今にはじめぬ御事なれども。我君の
御威光のめでたさは候。打ちならべたる幕の内。

目をおどろかしたる有様にて候。かほどに多き人の中に。我等兄弟が幕の内程物さびたるは候ふまじ。

シテ「さん候今にはじめぬ君の御威光にて候。さて彼あらましは候。

十郎「あらましとは何事にて候ふぞ。

シテ「あら御情なや。我等は片時も忘るゝ事はなく候。彼祐経が事候ふよ。

十郎「げに／＼某も忘るゝ事はなく候。さていつをいつまでながらへ候ふべき。ともかくも然るべきやうに御定め候へ。

シテ「御説の如く。いつをいつとか定め候ふべき。今夜夜討がけに彼者を討たうとするにて候。

十郎「それが然るべう候。さらばそれに御定め候へ。や。

思ひいだしたる事の候。我等故郷を出でし時。母にかくとも申さず候ふ程に。御なげきあるべき事。

是のみ心にかかり候ふ間。鬼王か団三郎か。兄弟に一人形見の物を持たせ。故郷へ帰さうするにて候。

シテ
「げには是は尤にて候ふさりながら。一人帰れと申し候はゞ。定めてとかく申し候ふべし。唯二人ともに御かへしあれかしと存じ候。

十郎
「尤にて候。さらば二人ともに此方へ参れと御申し候へ。

シテ
「畏つて候。いかに団三郎。鬼王此方へ参り候へ。

団三郎
「畏つて候。

シテ
「団三郎兄弟是へ参りて候。

十郎
「いかに団三郎。鬼王もたしかに聞け。汝兄弟に申すべき事を承引すべきか。又承引すまじきか真直に申し候へ。

団三郎
「是は今めかしき御詫にて候。何事にても候へ御意を背く事はあるまじく候。

十郎 「あらうれしや。さては承引すべきか。

團三郎 「畏つて候。何事も御詫をば背き申すまじく候。

十郎 「此上はくはしく語り候ふべし。さても我等が親の敵の事。彼祐経を今夜夜討がけに討つべきなり。兄弟空しくなるならば。故郷の母歎き給はん事。あまりにいたはしく候ふ程に。形見の品々を持ちて。二人ながら故郷へ帰り候へ。

團三郎 「是は思ひもよらぬ御詫にて候ふ物かな。御意も御

意にこそより候へ。此年月奉公申し候ふも。此御大事に真先かけて討死仕るべき為にてこそ候へ。何と御詫候ふとも。此義においては罷り帰るまじく候。鬼王さやうにてはなきか。

鬼王 「中々の事尤にて候。まかり帰る事はあるまじく候。十郎 「何と帰るまじいと申すか。

團三郎 「ふつゝとまかり帰るまじく候。

十郎 「是はふしげなる事を申すものかな。さてこそ以前

に詞をかためて候ふに。さてはふつゝと帰るまじきか。

団三郎 「さん候。

十郎 「汝はふしげなる者にて候。なふ五郎殿あれを御帰し候へ。

シテ

「畏つて候。やあ何とてまかり帰るまじいとは申すぞ。さやうに申さうずると思し召してこそ。始より詞をかためて仰せられ候ふに。何とて帰るまじ

いとは申すぞ。しかと帰るまじきか。

鬼王 「まづ畏つたると御申し候へ。

団三郎 「畏つて候。

シテ

「しかと帰らうずるか。

団三郎 「まかり帰らうずるにて候。

シテ

「あふそれにてこそ候へ。まかり帰らうずると申し候。

十郎 「何と帰らうずると申すか。

団三郎

「さん候。いかに鬼王に申し候。

鬼王

「何事にて候ふぞ。

団三郎

「さて何と仕り候ふべき。まかり帰れば本意に非ず。

鬼王「歸らねば御意に背く。とかく進退こゝに窮つて候。

「仰せの如くまかり帰れば本意に非ず。又歸らねば

御意に背く。我等も是非をわきまへず候。但し急度案じいたる事の候。いづくにても命を捨つるこそ肝要にて候へ。恐れながら団三郎殿とはに

て刺し違へ候ふべし。

団三郎

「げにげにいづくにても命をすつること肝要なれ。

いざさらば刺しちがへう。

鬼王

「尤にて候。

シテ

「あゝ暫く。是は何としたる事を仕り候ふぞ。

十郎

「やあ兄弟の者帰すまじきぞ帰すまじきぞ。まづ

く心を静めて聞き候へ。今夜此所にて祐経を討ち。我等兄弟空しくならば。さて故郷にましま

す母には誰か斯くと申すべきぞ。敬ふものに従ふ
は。君臣の礼と申すなり。之を聞かずは生々世々。
長き世までの勘当と。

「かきくどきのたまへば。く。鬼王団三郎。さら
ば形見を賜はらんと。いふ声の下よりも。不覚の
涙せきあへず。

「夫れ人の形見を贈りしためには。彼唐の樊噲が。
母の衣を着替へしは。永き世までのためしかや。

「今当代の弓取の。母衣とは是を名づけたり。

「然れば我等が賤しき身を。譬ふべきにはあらねど
も。恩愛の契りのあはれさは。我等を隔てぬ習ひ
なり。

「さる程に兄弟。文こまぐと書きをさめ。是は
祐成が。いまはの時に書く文の。文字消えて薄く
とも。形見に御覧候へ。皆人の形見には。手跡
に勝る物あらじ。水茎の跡をば。心にかけて弔ひ

クセ

十郎サシ

給へ。老少不定と聞く時は。若き命も頼まれず。

老たるも残る世の習ひ。飛花落葉の。ことわりと

思し召されよ。其時時致も。膚の守りを取りいだし。是は時致が。形見に御覧候へ。形見は人のなき跡の。思ひの種と申せども。せめて慰むならひなれば。時致は母上に。添ひ申したると思し召せ。今までは其主を。守仏の觀世音。此世の縁なくと。来世をば助け給へや。

十郎

「既に此日も入相の。

地「鐘もはや声々に。諸行無常と告げ渡る。さらばよ急げ急げ使。涙を文に巻きこめて。其まゝやる文の干ぬ間にと。詠ぜし人の心まで。今更思ひ白雲の。かかるや富士の裾野より。曾我に歸れば兄弟。

すごくと跡を見送りて。泣きて留まるあはれさよ。く。(中入)

「寄せかけて。打つ白波の音たかく。闕を作つて騒

後ジテ
ぎけり。

「あらおびたゝしの。軍兵やな。我等兄弟うたんとて。多くの勢は騒ぎあひて。こゝを先途と見えたるぞや。十郎殿十郎殿。何とて御返事はなきぞ十郎殿。宵に新田の四郎と戦ひ給ひしが。さては早討たれ給ひたるよな。くちをしや死なば骸を一所とこそ思ひしに。物思ふ春の花ざかり。散りぐになつてここかしこに。骸をさらさん無念やな。

地「味方の勢は是を見て。く。打物の鎧本くつろげ。時致を目がけてかゝりけり。

シテ
「あら物々しやおのれ等よ。

地「あら物々しやおのれらよ。先に手並は知るらん物をと。太刀取りなほし。立つたるけしき。ほめぬ人こそなかりけれ。かゝりける所に。く。

御内方の古屋五郎。樊噲が怒りをなし。張良が秘術を尽しつゝ。五郎が面に切つてかゝる。時致

も古屋五郎が抜いたる太刀の。しのぎを削り。しばしが程は戦ひしが。何とか切りけん古屋五郎は。二つになつてぞ見えたりける。かゝりける処に。
く。御所の五郎丸。御前に入れたてかなはじ物をと。膚には鎧の袖を解き。草摺かろげにざつくと投げかけ。上には薄衣引きかづき。唐戸の脇にぞ待ちかけたる。

シテ
「今は時致も運櫬弓の。

地
「今は時致も運櫬弓の。力も落ちて。まことの女ぞと油断して通るを。やり過し押しならべ。むんずと組めば。

シテ
「おのれは何者ぞ。

五郎丸
「御所の五郎丸。

地
「あらものくしとわだがみつかんで。えいやくと組みころんで。時致上になりける処を。下よりえいやと又押し返し。其時大勢おり重なつて。千

筋の縄をかけまくも。かたじけなくも君の御前に。
追つ立て行くこそめでたけれ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第三輯」大和田建樹著